様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　3 月　31 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520298
研究課題名（和文）　1920 年代、北京を中心とした文学結社の活動

研究課題名（英文）　A study of the literature association in Beijing of 1920's

研究代表者
齊藤　大紀（SAITO HIROKI）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：70361938

研究成果の概要（和文）：
本研究は、1920 年代の北京で急速に発達した新聞副刊・同人誌などの文学メディアの状況に着目しつつ、文学結社の活動を検証したものである。当時の文学青年であった沈従文（1902-1988)・于賡虞（1902-1963)・胡也頻（1903-1931）らは、これらの文学メディアの発達によって多くの作品を発表し、彼らは後に優れた作家・詩人となっていったのであった。本研究は、この観点から、中国現代文学の新しい一側面を明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：
This study inspected activities of the literature association paying attention to the situation of the literary media such as newspaper supplement and the literary coterie magazine that developed rapidly in Beijing of 1920's. SHEN Congwen 沈従文（1902-1988）, YU Gengyu 于賡虞(1902-1963) , HU Yepin 胡也頻（1903-1931) and others who were a then literary youth published a lot of works by the development of these literary media, and they became an excellent writer and poet later. This study clarified one new side of the modern Chinese literature from this point of view.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国、現代文学、北京、文学結社

１．研究開始当初の背景

1920 年代の北京における文学活動は、しばしば「五四退潮期」という言い回しで総括され、左翼文学が流行する以前の、沈滞した状況にあったとされてきた。

しかし、この「五四退潮期」なる言い回し

は、おそらく魯迅らをはじめとする、五四時期に名を成した作家たちに目線を据えてなされたものと言っていいだろう。1900 年前後に生まれた、当時、20 歳前後の後発の作家、あるいは文学青年たちに目線を据えたならば、1920 年代の文学状況についても、おそらくまったく異なった見かたができるはずである。

当時の北京は、さまざまな面で近代化を急速に進めていた。1920 年代前半の北京においては、新聞副刊、大学学生自治会発行の雑誌、同人誌などのメディアが急速に発達し、まさに空前の活況を呈していたと言っていいだろう。たとえば 1924 年には、北京において 43 紙の新聞、30 誌の雑誌が創刊されている。また大学学生自治会発行の雑誌については、23 年に『燕大週刊』が創刊され、24 年に『北京交通大学週刊』、『工大週刊』、『民大週刊』の 3 誌が創刊され、25 年に『民大月刊』、『清華文芸』など 5 誌が創刊された。

よって、当時の北京の文学状況、さらに言えば、テキストの産出状況をトータルに理解するためには、近代化を急速に進めていった当時の北京の状況も視野に入れつつ、より多くの、新聞副刊、学生自治会発行の雑誌、同人誌を調査する必要があるであろう。そして、これらの文学メディア発行の母体となった文学結社の活動についても調査しなければならないであろう。

従来、北京における文学結社についての研究は、魯迅を中心とした莽原社、語絲社に関する研究が数多く存在する。さらに2006年に入り、中国において、「中国現代文学社団史研究書系」なる叢書が刊行され、陳離『在“我”与“世界”之間：語絲社研究』（中国出版集団東方出版中心、2006年）などの研究成果（教育部哲学社会科学研究重大項目成果）が出版されて、大きな進展を見せているところである。

本研究申請者も、2000～03 年度に「1920 年代、北京の『公寓』における文学活動」（日本学術振興会特別研究員奨励費）、2004～06 年度に「1920 年代、北京文壇における散文詩の発展」（科学研究費若手研究 B）の研究費を受け、研究を進めてきたところである。その過程で、『京報』、『世界日報』などの新聞のマイクロフィルムを購入し、また『燕大週刊』、『清華文芸』などの学生自治会発行の雑誌を上海図書館などにおいて実見することができた。その成果は、沈従文「北京の文芸刊行物および作者」の訳注（『湘西』第 7、8 号、2005、06 年）および「1925 年、北京、文芸の畑――沈従文『北京の文芸刊行物および作者』をめぐって――」（『野草』第 77 号、2006 年）などで公表したところである。

本研究は、以上のような経緯によって、また以上のような認識のもとに、当時の北京の文学状況の一側面を明らかにしようとしたものである。

２．研究の目的

1920 年代の北京におけるメディアの発達は、たとえば沈従文、于賡虞、胡也頻、丁玲、蹇先艾、李健吾、焦菊隠、馮至らの、若き文学青年たちに、作品の発表の機会を提供することになった。沈従文などは、投稿によって作品を発表して原稿料を手にし、いわば「投稿作家」とでもいうべき身分で日々の生活を送ることになったほどである。彼らは、その過程で、自己の作品を「商品」として販売するという意識が芽生え、質のよい作品=商品をメディアに提供して行くことを考えるようになる。

さらに彼らは、無須社、曦社、緑波社、沈鐘社などの文学結社を結成し、良質な作品=商品とは何かということをともに議論しながら、同人誌を創刊し、また新聞副刊を借りて、すでに文壇で名を成した編集者の文芸観に拘束されることなく、彼らが思うところの良質な作品を発表しようとしたのであった。

このような文学生産システムのもとで、彼らは互いの作品を読み合って批評し、それぞれの文学的感性、技量を高めていったのであった。この時期の彼ら青年作家の活動を研究することは、この点において、それぞれの作家の創作活動の歴程を検討するうえで、必要不可欠なことと言えるであろう。

さらに中国現代文学全体に視野を広げたとき、その後、沈従文らが優れた作品を発表し、中国現代文学を代表するような作家に育っていったことを考えれば、中国現代文学史の一側面の解明においても、極めて大きな意義を持つものと言えるであろう。

３．研究の方法

本研究では、現在日本では所蔵されていない、1920 年代の北京の文学結社の活動の軌跡を示す新聞副刊、同人誌、書籍などの資料を、北京大学図書館、上海図書館などにおいて調査した。あわせて近年中国で編集・出版された『徐玉諾詩文輯存』（河南大学出版社、2008 年）などの書籍を購入した。

本研究においては、これらの収集資料を精読することにより、当時の文学青年たちの活動の一側面を再構成しつつ、彼らの創造した文学作品の思想内容、芸術技巧について検討を加えるものである。

４．研究成果

本研究では、まず『世界日報副刊』の目録作成の基礎作業を行った。また北京大学図書館に赴き、1920年代の北京を代表する学生自治会発行の雑誌であった『燕大週刊』の調査

を行い、これまでの科研費による研究で行った上海図書館、北京大学図書館における同誌への調査とあわせて、ほぼ全巻の目録を調査し終えることができ、また沈従文や于賡虞関連の貴重な資料を収集することができた。

『世界日報副刊』、『燕大週刊』は、当時の北京の文学界にあって大きな役割を果たしたにもかかわらず、新文学の主流から外れていたため、これまで目録などがなかった。このため、これらの作業を進めることは、中国現代文学の研究において、一定の意義を持つものと言えるだろう。この作業は、現在も継続中であり、本研究の研究終了後も継続しておこなうこととする。

また近年、中国では現代文学作家の新たな全集が編集し直されて、新たに続々と出版されている。本研究においても、それらの全集を購入、収集し、当時の文学状況の解明に役立てた。購入した全集には、『魯迅全集』（人民文学出版社、2005年）、『郁達夫全集』（浙江大学出版社、2007年）、『徐玉諾詩文輯存』(河南大学出版社、2008年)、『周作人散文全集』(広西師範大学出版社、2009年)、『廃名集』(北京大学出版社、2009年)、『王統照全集』(中国工人出版社、2009年)『魯迅著訳編年全集』(人民出版社、2009年）などがある。本研究においてはまた、従来の文学研究の手法のみならず、北京の都市史研究という視点も不可欠であるため、『北京文史資料精選』全19冊（北京出版社、2006年～）などの北京関連の資料も収集した。さらに近年の中国における中国現代文学の研究成果を積極的に取り入れるため、例えば黄修己・劉衛国主編『中国現代文学研究史』(広東人民出版社、2008年）などの数多くの学術書を購入し、参照することができた。

本研究では、以上のような収集資料の調査に基づき、またこれまでの科研費による研究を引き継ぎつつ、特に于賡虞の詩作活動について、中国文芸研究会において報告を行い、それを論文にまとめた。

于賡虞は、現在すでに忘れ去られた観のある詩人ではあるが、天津にあっては趙景深、焦菊隠らとともに緑波社の主要メンバーであり、北京にあっては沈従文、胡也頻らとともに無須社を結成した。まさに当時の学生あるいは文学青年による文学サークルの主要メンバーであったと言えよう。そして于賡虞が 1926 年に出版した詩集の『晨曦之前』は、その感傷主義的な詩が多くの文学青年たちを引きつけ、大きな影響をもった詩集となったのであった。

また于賡虞は、当時、燕京大学学生であり、本研究の主たる研究対象のひとつである『燕大週刊』の編集にもたずさわっていた。1926 年の春には『晨報・詩鐫』の活動にも深く関わっていた。『晨報・詩鐫』に関しては、徐志摩や聞一多の活動がクローズアップされることが多いが、于賡虞や沈従文といった文学青年の立場から研究し、彼らにとっての格律詩運動の意味を考察し、その活動の解体の理由を考察することができた。また 1926 年に于賡虞は、無須社の主要メンバーとして、沈従文らと『世界日報・文学週刊』も発行しており、『晨報・詩鐫』の活動との関わりから『世界日報・文学週刊』の発行の経緯を考察することができた。

その結果、于賡虞の詩の特徴である感傷主義が、3.18 事件などの暗い世相にあって、多くの文学青年に歓迎されるとともに、饒孟侃らの批判を招くことになり、于賡虞らの『晨報・詩鐫』からの離脱を招くことになったことがわかった。さらに于賡虞に関しては、沈従文の文学作品と比較した上で、あくまでも格律詩にこだわって詩の表現が硬直していった于賡虞の文学的特徴と、さまざまな詩のスタイルを試みながら感性豊かな表現を追求していった沈従文の文学的特徴を明示することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①齊藤大紀、于賡虞の詩-3.18事件、『晨報・詩鐫』をめぐって-、『野草』査読有、第82号、中国文芸研究会、2008、pp. 13-33

②齊藤大紀、消費される感傷-沈従文と于賡虞、『湘西』査読有、第10号、白帝社、2008、pp. 45-64

〔学会発表〕（計 1 件）

齊藤大紀、于賡虞と沈従文、中国文芸研究会例会、2007

〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
齊藤　大紀（SAITO HIROKI）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：70361938

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：